アンドレ・ブルトンにおけるシュルレアリスム的エクリチュールと女性たちの関係

加　藤　彰　彦

アンドレ・ブルトンによって行なわれた自動記述以後のシュルレアリスム的エクリチュールの可能性とその展開の状況について探る。この論考においては愛を通して幸福を追求するブルトンが現実における女性たちとの関わりをいかにエクリチュールに反映させたかに焦点を絞った。ここで問題になるのは象徴詩におけるように愛についての抽象的観念的な表現ではなく、あくまで具体的な事例に基づいていかにエクリチュールが展開されるかということである。従ってブルトンにとっての三人の妻、つまりシモーヌ、ジャクリーヌ、エリザとの関係、更には数多くの愛人たちとの関係を踏まえた上で、それがいかにテキストに反映されているかをまず検証した。次にテキストの側から、具体的には『ナジャ』『通底器』『狂気の愛』を対象として女性との関係がエクリチュールとして展開されている部分を抽出し、それに検討を加えた。このことから、かつては愛の対象であったかもしれないが、エクリチュールの段階においては既に終わってしまった最早愛の対象ではない女性について、限定された枠の中でエクリチュールが展開されることがわかった。つまり既に終わってしまって、その後何ら進展が見られないということから、明確に対象化できるものについてエクリチュールが展開されるのである。更にある一定の事例を記述するだけではなく、様々なエクリチュールが展開される要因として、そこに謎が含まれていて、その謎の解明、探求ということからエクリチュールの広がりを期待できるということになる。またこれらの検討を通して、ブルトンの上記の三つの著作がブルトンの愛人であったシュザンヌについての三部作としても捉えられることが明らかとなった。

キーワード： シュルレアリスム的エクリチュール、『ナジャ』、『通底器』、『狂気の愛』、シュザンヌ三部作

序章

スタンダールの墓碑銘には「生きた、書いた、愛した」と書かれているが、それと比肩し得るのがアンドレ・ブルトンであり、『秘法17番』の最後において「そしてこの光は三つの進路しか自らにおいて知り得ないのである。つまり変わらぬ熱意を引き起こし、そしてそれでもって永遠の若さというまさに切り口にするために、人間の心の最も開かれていないが最も明らかにし得る地点に集中するはずである詩、自由そして愛である。」(PIII pp.94-95)[1]と書くブルトンにおいて書くことは背後に隠れてしまっている。とは言いつつも、例えば『シュルレアリスム宣言』においてシュルレアリスムの定義がまさに自動記述を示しているように、シュルレアリスムにおいて書くことは重要な問題であった。マルグリット・ボネが指摘するように、「初期

シュルレアリスムとはつまりエクリチュールの方法」(PI p.XXI)なのである。ここにおいてマルグリット・ボネが「初期のシュルレアリスム」と限定しなければならなかったのは、この初期のシュルレアリスムと同義語として捉えられる自動記述が、シュルレアリスムの初期の一時的なものとして捉えられるからである。自動記述の作品としては、この『シュルレアリスム宣言』に付される形で公けにされた『溶ける魚』があるが、他には時期的には『溶ける魚』に先行し、文学史上自動記述の最初の実例とされているフィリップ・スーポーとの共著である『磁場』がある。これについては『シュルレアリスム宣言』においてその成立過程が書かれている。自動記述による作品がこれらに限られるのであれば、自動記述とはまさに初期シュルレアリスムと捉えることが可能なのであるが、それを否定するのではないとした上で、付け加えなければならないのは、この『磁場』のような自動記述的共著として例えば、1930 年にポール・エリュアールとの共著として刊行された『処女懐胎』がある。『磁場』を生み出す試みが為されたのが、トリスタン・ツァラへの手紙から 1919 年 6 月頃であったとされ、また『磁場』の刊行が 1920 年 5 月 30 日、『溶ける魚』の刊行が 1924 年 10 月 15 日であるから、時期的にも少し隔たりがある。ちなみにプレイアード版の第一巻は収録作品の時期としては 1930 年までとなっていて、言わば中期にさしかかる頃であったとも言えるわけである。またこの『処女懐胎』は、例えば『磁場』と比べるなら自動記述の自動度が低くなっているということも指摘しておかなければならない。それでもこのようなテキストが産み出された背景には、相変わらず自動記述的なものがエクリチュールの方法として依然として意識され続けてきたということが言えるわけである。あるいはまた自動記述と銘打っていなくても、ブルトンにとってエクリチュールの問題はブルトンにとっての関心事であったととりあえずは捉えることができるのであるが、それでは自動記述を離れてエクリチュールを実践するとした場合、さて何をどのように書くのかという問題になる。自動記述的なエクリチュールということであれば、その根底にあるものは無意識なのであるが、その立場を一旦離れるとして、その手掛りを与えてくれるものは『ナジャ』であろう。それは『ナジャ』の中心部分をなすナジャの物語の前後に、ナジャの物語を書くにあたってのブルトン自身の批評的なテキストが提示されているからである。例えばブルトンはナジャの物語を書くにあたって、自分が体験した様々な出来事が起こった場所という観点から出発点とある意味到達点を設定するのであるが、その様々な出来事を書き記すにあたって次のように書くのである。「この領域において感じる機会が私に与えられたことの包括的な報告を私に期待しないこと。(中略) 私は予め設定された順序ではなく、思い浮かぶものを思い浮かぶがままにさせる時の気紛れに従って、そのことを話すだろう。」(PI pp.652-653)

自動記述を標榜した初期シュルレアリスムの著作である『シュルレアリスム宣言』の刊行が 1924 年で、この『ナジャ』の初版の刊行が 1928 年であるから、自動記述を完全に放棄してしまったわけではないにしても、自動記述に代わるエクリチュールのあり方が窺えるだろう。実際ブルトンは『ナジャ』の終わりの部分において「私はもう一度無意識しか認めたくはないのだし、私はそれしか当てにしたくはないのだ。」(PI p.749)と書くわけであるから、依然として自動記述という流れの中にいることは確かであり、その意味で先程のエクリチュールのあり方はシュルレアリスム的なエクリチュールのあり方を示していると考えられるのである。ただし

この場合、無意識に依存するとか無意識を書き記すというわけにはいかないだろう。つまりブルトン自身『ナジャ』において次のように書く時、「私が私自身に対して取り乱した目撃者でしかあり得ないこれらの事実から、私が一部始終を見抜き、そしてある程度推定できると思う別の事実に至るまでと、＜無意識的な＞文やテキストを構成するこれらの断定の一つもしくはこれらの断定のまとまりの一つから、同じ観察者に対して、全ての言い回しが彼によって慎重に熟考され検討された文やテキストが構成する断定もしくは断定の全体に至るまで、恐らく同じ距離があるのだ。」(PI p.652)というわけで、自動記述ではないエクリチュールにおいてブルトンは書いている対象ないしは内容についてある程度自覚的でなければならないということは明らかだろう。自動記述と称されるエクリチュールにおいても完全に自動的であるということはなく、何かしら意識に囚われていた内容に左右されるということがあるが、明らかに自動記述ではないエクリチュールにおいて何を書くか、何について書くのかは当然問題になってくるはずなのである。従ってここにおいて我々は、ブルトンがシュルレアリスム的なエクリチュールにおいて何を書くのかというその対象もしくは内容を問題にする必要に迫られることになる。もっとも我々はこの論考において、ブルトンのエクリチュールの対象を検証する目的はない。むしろ論考の進め方としては、ある対象についてブルトンはどのようなエクリチュールを展開したか、そしてそれがどのような点においてシュルレアリスム的であるかを明らかにしたいと思うのである。例えばブルトンは『失われた足跡』の中の「ダダ以降」において次のように書いている。「問題なのはそれらの探求であって、他のことではないのだ。そこから我々が我々の中にあって作らなければならないこの大いなる空虚があるのだ。（中略）たとえ全ての思想が我々の期待を裏切りかねないものであるとしても、私はそれでもまずは最初に私の人生を思想に費やすつもりなのだが。」(PI p.261)

つまり我々が我々自身となる過程において認められる空白を埋めるために思想という言葉の群れを用いると考えるなら、ブルトンはそれをエクリチュールによって明らかにしていきたいと考えるわけで、極めて興味深い立場である。しかし我々はこの論考において、このような興味ある立場を問題にしない。我々がこの論考においてブルトンのシュルレアリスム的エクリチュールを解明する鍵として捉えたのは、ブルトンが『秘法 17 番』の最後において示した「詩、自由そして愛」の中の「愛」なのである。まずこの観点の正当性、ブルトン自身が認める重要性について明らかにしておこう。『シュルレアリスムの哲学』を書いたフェルディナン・アルキエは次のように書いている。「そういうわけで、愛のシュルレアリスム的見解が、後に経験しなければならなかった充実と迷いがいかなるものであるとしても、ブルトンの探究の最初の誘因の一つは、愛の中で存在したい、そして愛によって幸せに出遭いたいという欲望であったと思われる。」(PS p.14)「シュルレアリスムとは生き方である。シュルレアリスムにとって文学作品を作ることは重要ではなくて、人間の持つ様々な力を表に現わし、愛し、希望し、そして発見することが重要なのである。」(PS p.23)

ここにおいてシュルレアリスムの中の愛の位置付けが見えてきたわけであるが、ブルトン自身の言葉に注目するなら、『黎明』の中の「X…、Y…展覧会」において、「愛の他に解決はないのだ。」(PII p.301)

『シュルレアリスム宣言』において、「次に最も重要な点とは、我々が我々の支配者、そして女性たちの、愛の支配者でもあるということではないか。」(PI p.322)

『シュルレアリスム第二宣言』において、「もしある概念が今日までに単純化というあらゆる企てを免れ、最大の悲観論者に反抗したと思われるにしても、我々は一時的であろうとなかろうと、全ての人間を人生（下線原文）という概念と和解させることができるのは、唯一愛（下線原文）という概念であると考えている。」(PI p.823)

つまり愛とはシュルレアリスムの中における重要な主題であって、そしてそれはまた実際の生活においても問題となることなのである。この愛の過程において、女性は当然の如く賛美される存在である。ブルトン自身『シュルレアリスム第三宣言　発表か否かのための序論』において、次のように書いているのだ。「シュルレアリスムにおいて、女性は大いなる約束として、守られてしまった後でも存続するそれとして、愛され称賛されてしまうだろう。」(PIV p.22)

しかし一方で女性と雖もあくまで現実の存在であるために、ただ単に賞賛し続けるだけでは終わらない。つまり先程の『シュルレアリスム第二宣言』における愛の定義に先行して、次のようにも書いているのだ。「女性の問題は、この世で存在する素晴らしくかつ怪しげなものの全てである。」(PI p.822)

そしてこのような愛に関する議論が抽象的で観念的なものに終始して一向に結論に向かうことができないという状況に陥らないためにも、体験に基づいた具体的な議論が求められることになる。だからこそアルキエは『シュルレアリスムの哲学』において、ブルトンのテキストに関連して次のように書くのである。「例えばシュルレアリスム的な作品において、体験を詳しく語り、何よりもまず真実と意味の問題を提示している数多くの頁だ。それらの頁が美しいということが恐らく問題になるのだ。それはなるほど問題ではない。問題なのは、物理学概論におけるように、詳しく語られた体験が客観的に書き写されているかどうかを知ること、その意味と影響力を明らかにすることなのである。（中略）ぎこちなくて不器用な物語が、我々に同じ事実を詳しく語っているとするなら、同じ価値を持つだろう。重要なのは内容であって、証言の形式ではないのである。」(PS pp.24-25)

我々はここに至ってようやく議論を展開するための出発点に立つことができる。つまりこのアルキエの指摘にあるように、愛の問題を語るためには、いかに事実を客観的に物語るかということが重要なのであって、その書き方というものはさほど問題にもなっていないということである。このように考えるならば、ブルトンが『ナジャ』を書くにあたって「＜ありのままに受け取られた＞資料をどの点でも改竄しないよう気を配るこの決意」(PI p.646) を保持しつつ、「私は予め設定された順序ではなく、思い浮かぶものを思い浮かぶがままにさせる時の気紛れに従ってそのことを話すだろう。」(PI p.653) という執筆方法をとることも理解できるわけである。そしてこのような理解をした上で、ブルトンと女性たちとの関わりを見ていくわけであるが、まず明確にしておかなければならないのは、興味のあるなしに拘らず、ブルトンと女性たちの関係を詳細に明らかにしていくことがこの論考の目的なのではない。アルキエも『シュルレアリスムの哲学』において指摘しているように、「ブルトンは彼自身、次々とそして情熱を込めて、何人もの女性を愛してきたとはっきり言っているのである。」(PS p.98) し、またブル

トンは『ナジャ』において、「私はあくまでも名前を要求し続けるし、扉のように開け放たれるがままにしてあって、実在の人物の名前を変えたモデルを探す必要のない本にしか興味を持たないことに固執するのだ。」(PI p.651) と書いているわけであるから、ブルトンのテキストを読めばそのあたりの事情は明らかになるはずであるが、実際はそうとも言えない。このあたりのこともこの論考において後で明らかになると思われるが、例えばブルトンの結婚生活についてもテキストからはあまり明確に読み取れない。『ナジャ』において、ナジャの物語の 10 月 7 日に次のような箇所がある。「私は 3 時頃、私の妻と一人の女友達と一緒に出かける。タクシーの中で私たちは昼食の間そうしていたように、ナジャについて話し合いを続ける。」(PI p.701)

また『狂気の愛』においても、次のような記述がある。「次の 8 月 14 日、私はヒマワリの夜の段取りをする絶大な力を持つ女性と結婚していたのだ。」(PII p.735)

もっともこのような記述はむしろ例外的とも言うべきものであって、ブルトンのテキストをただそれだけのものとして読んでいれば、我々にはそのあたりの事情はほとんどわからないと言うべきだろう。この点に関してブルトンに関する研究書も同様であって、例えば「永遠の作家叢書」に収められているアレキサンドリアンの『ブルトン』においての記述は、「ジャクリーヌ・ランバと結婚した後」(BR p.127) というのと「彼が 1943 年にニューヨークで出会い、死ぬまで彼の伴侶である女性、エリザ」(BR pp.128-129) だけであり、それだけを読めば生涯二度の結婚かと思わせるが、事実はそうではない。ブルトンには他にも愛人がいて、いくつかの恋愛事件もあるのだが、その点については一切触れられていない。既に明らかにしたように、我々はこの論考においてブルトンのそのあたりの事情を詳細にすることを目的としているのではない。そもそもブルトンについての研究書において明らかにされる諸々の女性関係についても、主としてブルトンから送られてきた手紙や関係者の証言をもとにしてその存在が明らかにされていて、私的な領域の問題については限界があるだろう。ブルトンの内心の問題をどこまで明確に出来るかということでもある。またブルトン自身死後 50 年経ってからでなければ手紙を公刊してはいけないと明言しているので[2]、つまりブルトンは 1966 年死去であるから、2016 年まではブルトンの私生活については明らかにすることはできないのである。従って我々はこのような状況にあって、アンリ・ベアールの『アンドレ・ブルトン　望まれざる巨人』と、プレイアード版に付されているマルグリット・ボネの年譜を参照し論考を進めた。特に前者については、既に指摘したようにブルトンの死後 50 年間は個人的な書簡の公開が禁じられていると信じられていたのであるが、実際はそうではなく、禁止の対象はブルトン自身が受取人となった書簡に限定されるということで、遺族によって著者に認められた許可もあり、従来のものよりはブルトンの私生活については明確になっていると捉えることができる。また後者については、マルグリット・ボネ自身が手紙のコピーを持っているという事情もあり、年譜の信用性も高いと判断したことによる。我々はまずこの論考の第一部においてこれらの文献を基にしながら、主として三人の妻たちとの関係がいかにブルトンのテキストに反映されているかを検討することにした。次に第二部においては、逆にテキストの側から、つまりブルトンのテキストにおいて、シュルレアリスム的エクリチュールの実践と思われる、気ままではあるが、実際に体験した女性たちとの関係を記述している箇所を抽出し、何故それがテキストとして結実す

ることになったのかを検証することになる。このように実際の女性たちとの関わりとテキストの中の女性の記述という両面からの接近法を採用したのは、明らかに異同ないしはずれがあるからである。ブルトンのテキストを一読して、ブルトンの私生活、特に結婚生活について大よそが把握できたという事態にはならないのだ。数々の女性を愛したと公言し、かつ人生とエクリチュールは密接に関係し合っていると考えるブルトンにとって、つまりマルグリット・ボネが指摘するように、「人生から生まれた書物は、今度は人生を方向付ける。」(PI p.XXI) と捉えられているブルトンにとってこのようなずれは何を意味するのか。このあたりの解明がシュルレアリスム的エクリチュールの本質を明らかにすることができると我々は考えるわけである。

第一部　ブルトンの愛した女性たちはいかにテキストに反映されているか

第一章　第一の妻、シモーヌの場合あるいはその周辺

アンリ・ベアールとマルグリット・ボネの女性に関する記述については、特に結婚相手ではない女性たちについては若干の違いがあって、この論考においてはそれらを統一的に捉えまとめるという意図は全くないので、個々の文献に沿って検討していくこととしたい。まずアンリ・ベアールの「ブルトン伝」の「めまいの時（1915 年-1916 年）」においては、アリスという女性について書かれている。その内容については、ブルトンがアンドレ・パリスに書いた手紙から明らかにされている。「私はアリスという名の非常に感じのいい女の子をほぼ愛しているも同然だ。彼女は人に不安を抱かせ繊細で、非常に美しい犬を連れていて、褐色の髪をし、神秘的で思いやりがある。彼女は私について何も知らないし、私も彼女について何も知らない、私たちが満足するためにしている礼儀とキスの味、一緒にいる時の陶酔を除いては……」(AB p.54)

この体験から生み出されたのが、ブルトンの最初の詩集である『慈悲の山』の冒頭に置かれている「流儀」という詩篇なのであるが、ベアール自身「そこにはある女性の輪郭の気分を奮い立たせると同時に打ちのめすような影響があると思われる。」(AB p.54) と指摘している。もっともこの詩篇は象徴詩の影響を受け、アリスという女性の具体的存在は全く窺うことができない。

次に「ブルトン伝」の「旧式の芸術への告発（1918 年 9 月-1919 年 10 月）」においては、ジョルジーナ・デュブルイユという女性との関係が書かれている。ブルトンは『ナジャ』においても明らかにしているように、1918 年の頃にパンテオン広場にある偉人ホテルに住んでいたのであるが、このすぐ近くにあるスフロ通りに住んでいたのがこの女性なのである。ブルトンが声をかけ、「波乱に富んだ関係」(AB p.99) が始まった。二人はブルターニュに旅行をしていて、ブルトンはこの旅行を自動記述の作品である『磁場』の中において「ハネムーン」と題して表現している。もっともこれも二人の関係を具体的に記述したものとはなっていない。ただ 1970 年に出された『等角遠近法』にはジョルジーナとの関係が、彼女の言葉を引用しながら具体的に書かれている箇所がある。

この次に記されているのは「ブルトン伝」の「緩やかな運動（1922 年-1924 年）」におけるものであるが、これは「その著者であるブルトンが、1 月 16 日、アラゴン、彼自身そしてドランと相次いで未知の女性と出会ったことを詳細に語っている」(AB p.148) のだが、あたかもナ

ジャとの出会いを思わせる出来事は、『失われた足跡』の中で「新精神」として収録されている。短いテキストであり、その女性の名前すら特定されないという状態ではあるのだが、その短さにも拘らず、『ナジャ』に匹敵する程の謎が含まれている。アンリ・ベアールも指摘するように、「目覚めさせられた生活のある種の不可思議を探しに行くことが重要なのである。」(AB p.148)

時期的に見ればこの次に現われるのがブルトンにとって第一の妻となるシモーヌなのであるが、その前にアンリ・ベアールの「ブルトン伝」には記載されていない女性の存在を、マルグリット・ボネの作成した年譜から確認しておきたい。1916 年にはナントで出会った女友達のアニー・パディウと再会するという記述があり、これは『ナジャ』にも記載されているとのことであるが、恋愛と言える程のものであったのか明確ではない。次にアリスの存在も指摘されているのであるが、マルグリット・ボネの記述によれば、「ナントでは他のいくつかの恋愛が彼の心を引いている。」(PI p.XXXIV) とあり、アリスだけではなかったようである。そしてこれらの恋愛はアリスの場合と同様に『磁場』におけるテキストに反映されているとのことであるが、少女たちもブルトンの描く詩の情景の中に入り込んでしまったかのような観がある。描写はある程度具体的なのであるが、少女は個別性を失わされ、具体的に誰であるのかがわからない状態である。

そして次がブルトンの第一の妻となるシモーヌの登場である、ブルトンと彼女の出会いは 1920 年の 6 月の終わり頃で、彼女はソルボンヌで文学の勉強を始めていた。ブルトンは彼女の魅力と知性が気に入り、7 月には数回会うことになるし、ブルトンがブルターニュに向けてパリを離れた時には手紙のやりとりが始まり、夏の間中続いたということである。そして二人が再会すると、一気に二人は結婚へと決意を固めるわけである。ただしシモーヌの父親は銀行家で、両親ともブルトンの定職のない経済的に不安な状態を案じて、結婚には反対だったようである。もっともこの後ジャック・ドゥーセがブルトンに仕事を与えることで、経済的不安もある程度解消され、これでもってブルトンとシモーヌの結婚は可能となったのである。1921 年 9 月 15 日、ブルトンとシモーヌは結婚する。1922 年の 1 月 1 日にブルトンとシモーヌはブランシュ広場の脇にあるモンマルトルの坂のフォンテーヌ通り 42 番地に居を構えることになる[3)]。1923 年の 8 月の中頃、ブルトンはシモーヌとともにロリアンに出向き、そこでヴァカンスを過ごす。幸せな日々であったようで、この時ブルトンは『地の光』に収録される詩を書いているのだ。ところがブルトンはこの『地の光』をガラという女性に、次のような言葉とともに献呈しているのである。「ガラへ、地獄の罰というある種の夢の霰を溶かす人の胸に。」(AB p.173)

シモーヌではなくてガラにというわけで、このあたりの事情は明らかではないが、『地の光』自体シモーヌとの具体的な関係が書かれているわけではないのだ。アンリ・ベアールはこのあたりの事情を踏まえてのことか、「シモーヌにはこれから何も決して起こらないと彼に言う気にさせている生来の悲観主義」(AB p.174) と表現している。我々が次の女性に移る前に確認しておかなければならないのは、ブルトンのテキストの中にシモーヌとの出来事を具体的に書き記したものを見出すことは今のところ不可能なのである。今後刊行されるブルトンの書簡集の中にそのようなものを見出すことは可能となるかもしれないが、少なくとも公開することを目的

として書かれたテキストの中にシモーヌの存在を見て取ることはほぼ不可能である。このあたりのことを考えれば、アレキサンドリアンの『ブルトン』の中にシモーヌとの結婚という事実すら抜け落ちてしまって、全く言及されていないということも少しは理解できるかもしれない。

次に 1923 年の 12 月のことであるが、ジェルメーヌ・ベルトンの裁判の時にブルトンは彼女の姿に魅惑されてしまう。ブルトンは彼女に革命と愛の化身を見て取るのである。彼女の存在は 1924 年の 12 月 1 日の『シュルレアリスム革命』誌の第一号で称賛されるのであるが[4)]、これ以上の展開は不明である。

ブルトンを初めとするシュルレアリストたちは、自分たちの集まる場所をシュルレアリスム本部と呼んでいたのであるが、この本部には様々な人が訪れていて、その中にオールド・イングランドの経営者と離婚したリーズ・メイエ（リーズ・ドゥアルム）がいた。アンリ・ベアールによると、「あまりにも感受性が強すぎる男性たちを悩ませるというあだっぽい女性たちが持つこの才能でもって、リーズ・メイエはブルトンを手玉にとり、それで彼はうろたえてしまう。」(AB p.195)

我々がこのような事情を知ることができるのは、ブルトンがシモーヌに送った手紙があり、それも 1925 年の 1 月 22 日、26 日、2 月 6 日、14 日と 4 回にもわたって送られているわけで、逆に言うなら、そこまで心情を吐露されたシモーヌは穏やかではなかったはずだ。アンリ・ベアールによると、「まさに誘惑そのものであり、ブルトンにとってリーズ・メイエは永遠にシバの女王であるだろう。」(AB p.195) ということであるが、ブルトンのテキストの中に彼女の存在を具体的に物語る記述を見出すことはできない。

この次に現われるのがナジャであって、『ナジャ』についての詳細な検討は第二部に譲るとして、経緯としては次のようなものである。1926 年の 10 月 4 日にブルトンはナジャと出会うことになり、10 月 13 日まで毎日会うが、それ以降は間隔があくことになる。1927 年の 2 月中旬には、ナジャとの関係が中断する。そしてこれ以降は『ナジャ』の執筆へと至るわけである。ここにおいて明らかなことは、ナジャのことでブルトンは翻弄されるとか思い悩むということはあまりなかったのではないかと思われることだ。むしろブルトンは既に言及したリーズ・メイエに翻弄されていて、1927 年の秋頃には彼女との関係を断ち切っている。これはブルトンが愛情を注いでいるにも拘らず、それを台無しにしてしまう彼女の意地悪さと無理解が原因であるらしい[5)]。これには妻であるシモーヌの突然の出発も関係しているかもしれない。アンリ・ベアールによると、「ブルトンが精神と心の動きのどれも隠さないでいるシモーヌ、いつも非常によく理解したシモーヌは突然心の葛藤を続けることを拒む。」(AB p.226)

このような事情もあり、ブルトンとシモーヌは別々にヴァカンスを過ごすことになるわけであるが、ブルトンはそのヴァランジュヴィル-シュル-メール近くのアンゴの館で『ナジャ』の執筆に取り掛かることになる。『ナジャ』の第一部を雑誌で発表したのが 1927 年の秋であり、直前にはシモーヌとの関係の悪化、リーズ・メイエとの関係の断絶があったわけであるが、この『ナジャ』の発表の後 11 月にはシュルレアリストたちが集まるカフェでシュザンヌ・ミュザールと出会い、お互いに惹かれ合うことになる。当時シュザンヌは雑誌の編集長でもあったエマニュエル・ベルルの愛人だったのであるが、ブルトンとシュザンヌは二人で南フランスに

出かけている。12 月半ば経済的事情もあり、二人はパリに戻り、シュザンヌはベルルとよりを戻すのであるが、ブルトンにしてみればシュザンヌは離れてしまったわけではないという意識がある。このあたりのことは具体的ではないながらも『ナジャ』の第三部において書かれていて、シュザンヌは「君」という呼びかけのもとブルトンにとって唯一無二の女性として表現されている。ブルトンとシュザンヌの関係はそれ以後も続き、シュザンヌ自身ブルトンに離婚を要求したため、ブルトンは 1928 年 10 月にシモーヌに離婚を申し出ることになる[6]。離婚の手続きは 1929 年の初めから行なわれることになる。ところがこのあたりの出来事は単純ではなく、アンリ・ベアールの指摘によれば次のような経過を辿ることになる。「シモーヌは最早フォンテーヌ通りには戻らない。予測できない存在であるシュザンヌは、1928 年 12 月 1 日ベルルと結婚する。しかし全く不合理なことでもあるのだが、彼女はいきなりベルルと別れ、そして 1 月からフォンテーヌ通りに住みつくのである。」(AB p.243)

その後シュザンヌはブルトンの家を出たり、あるいはまた二人でヴァカンスを過ごしたりとどちらとも言えない対応を示している。このあたりの事情がブルトンのテキストにどのように反映されているかを見てみるならば、アンリ・ベアールによれば、『シュルレアリスム第二宣言』においても言及されている『シュルレアリスム革命』のアンケートにおいて、シュザンヌは「愛以外にいかなる存在理由も決して私には認めないという希望」(AB p.249) と答え、「私は素晴らしい愛の勝利を信じている。」(AB p.249) とも付け加えている。このためブルトンはシュザンヌの愛を信じていたわけである。とは言え結局は落胆することにもなるわけで、『シュルレアリスム第二宣言』のある意味穏やかさに欠ける論争的なブルトンの姿勢はそのあたりの事情と関係があるかもしれない。ただし、シュザンヌのことが具体的にテキスト中において表現されているというわけではない。むしろこれは第二部においても詳細に検討することになるのであるが、『通底器』の第一部において夢の分析がされている中で、シュザンヌを X と表現して登場させる形になっている。1931 年 8 月 26 日の夢ということになっており、1928 年の『ナジャ』とともにシュザンヌはブルトンのテキストに出ているわけである。マルグリット・ボネによると、ブルトンはシュザンヌとの関係がうまく行かなくなって落胆している 1930 年の 3 月、ムーラン・ルージュの 20 歳の踊り子に夢中になったようである。ただ 4 月の中頃にはブルトンと別れている[7]。このような状況であるから、ブルトン自身『通底器』において「1931 年という年は私にとって極めて暗い見通しで始まった。」(PII p.120) と書くわけである。ナジャの物語である『ナジャ』において「君」という名のもと理想の女性として出現したシュザンヌが『通底器』において X と表現されて分析の対象となることについて、アンリ・ベアールの指摘は注目すべきである。「＜妻の側の要望書によりそして妻のための権利の全ての結果でもって＞3 月 30 日に言い渡されたシモーヌの離婚の判決に加えて、シュザンヌは最早ブルトンのところには戻ってこないだろうという考えをブルトンは受容しなければならない。そういうわけで、物質的そして社会的な全ての障害に打ち勝つ相思相愛というロマンチックにも若々しい理想は崩壊するのである。別離という苦悩に、それ以後二重の無知という苦悩が付け加わる。つまり、何故彼女は彼を愛することをやめたのか。彼女は今どこにいるのか。／彼自身別離の悲痛な思いに耐えてどのように生き長らえることができるのか自問する。」(AB p.270)

つまりエクリチュールとは体験の単なる記録ではなく、体験とともにそこから生じてきた何らかの疑問を解明していく作業において伴われるものなのである。このように考えるならば1932年の『白髪の拳銃』において表現されているものは、シュザンヌとの出来事がもとにあると推測されるが、具体的な事実が示されていないということで、我々がこの論考において問題にしているエクリチュールではないのである。また絶望から立ち直ることを求めて一般的な理想の女性像を描いた『自由な結合』においても同様である。むしろここにおいて必要となってくるのは、具体的な体験をもたらす現実の女性の存在であって、だからこそブルトンは次のような行動に出るわけである。「シュザンヌはブルトンにとって失われてしまっていたという確信が、彼を現実の目的もなしに、代わりの女性の探索へと巻き込む。」(AB p.273)

この後実際の女性としてヴァランティーヌ・ユゴーが現われることになる。彼女は1919年にジャン・ユゴーと結婚したが、1932年に離婚している。彼女の方がブルトンに対して積極的であったようである。一方ブルトンは彼女に対して単なる好意を示すだけであったようだ。このあたりの事情について、『革命なき革命家たち』を書いたティリオンは、彼女の方が年を取り過ぎていたからではないかと記している。この推測が正しいかどうかについては明確にすることはできないが、ヴァランティーヌの変わらぬ愛情にも拘らず、ブルトンは彼女と別れることにする。アンリ・ベアールの指摘によるならば、この時「ブルトンは詩人たちに心を打たれることのない一人の女の子に恋をしている。」(AB p.291)

ところでシュザンヌはベルルと別れ、ジャック・コルドニエに出会い、結婚することになる。後にブルトンと面会しているが、二人は以前とは違って落ち着いた様子をしていたようである[8)]。シュザンヌについてブルトンは『狂気の愛』第三章の第二の付記において簡単に触れているが、『ナジャ』や『通底器』において表現されている調子とは明らかに異なっている。それは『狂気の愛』をブルトンに書かせることになった第二の妻の存在があるからだと推測されるのであるが、このあたりにもブルトンにとってエクリチュールと女性との関係が明らかに影響し合っていることを物語っているわけであり、第二部において検討されることになるであろう。

第二章　第二の妻、ジャクリーヌの場合あるいはその周辺

1931年の初めにはブルトンはシュザンヌと決定的に破局することになるわけだが、これは主としてブルトンの経済的問題があって、シュザンヌがそれに満足できなかったためらしい。1931年の3月にはシモーヌとの離婚の決定が通告される。この後にブルトンは『通底器』を書き始めるわけで、検討は第二部に譲るが、このあたりの状況については注目しておくべきだろう。第一章で既に触れたことだが、1931年の夏の初めにヴァランティーヌ・ユゴーがブルトンの前に現われ、ヴァカンスを共に過ごすことにもなる。1932年の9月にブルトンは若い女の子か若い女性なのかよくわからないのだが、恋に落ち結婚したいと思うようになる。そのこともありヴァランティーヌとは破局することになるのだが、その若い女性ともうまくいかなかったようである[9)]。しばらくこのような状況が続いていたのであるが、1934年5月29日にブルトンは第二の妻となるジャクリーヌ・ランバと出会うことになる。第一章においては、実際の妻であるシモーヌの他に数々の愛人が存在し、ブルトンは本当のところ誰に愛情を注いでい

たのかよくわからないといった具合であったが、このジャクリーヌとの関わりが始まってからは、少なくとも資料によれば他に愛人がいたということはないようである。ブルトンはジャクリーヌに頻繁に手紙を出し、また実際に会ってもいたわけで、彼女との関係は密接なものになっていく。そして 1934 年の 8 月 14 日に二人は結婚することになる。このことについては、ブルトンは『狂気の愛』の中において明らかにしていることは既に指摘した通りである。1934 年の 10 月には『水の空気』を刊行するのであるが、これはジャクリーヌに向けて書かれたものであることがわかる。ただそれは様々な状況から判断した上でのことで、それらを抜きにしてテキストからだけでそれを判断することは不可能である。つまりそこには一般的なものとして昇華された愛が表現されているということなのである。ブルトンとジャクリーヌの関係は順調であったようで、楽しく過ごしている様子が窺える。1935 年の 10 月 20 日には、娘のオーブが生まれる。ところが 1936 年になると、ブルトンとジャクリーヌの関係は悪化し始める。突然不和になり、ジャクリーヌはフォンテーヌ通りのブルトンの自宅を出て、田舎に行ってしまうということがある。ところがまたその危機は解消されるといった具合で、ブルトンは終始愛情を注いでいることがわかる。このような不安定な関係はそれ以後も続き、資料によればジャクリーヌとオーブがいつどこで過ごしたかが記されるようになる。つまり家族三人揃って幸せな日々を過ごしたということではないようだ。この不和の原因についてブルトン自身よくわからなかったようだが、アンリ・ベアールの指摘によれば次のようなことが考えられる。「国際的な状況が、人民の議論の余地のない圧勝にも拘らず、憂慮すべきであるとすれば、ブルトンのそれもまさに同様である。資金がなく、ブルトンは＜美術評論家＞の資格で、文部省に援助を願い出なければならなかった。美術学校の方針で、ブルム政府就任の当日、2000 フランの貸付けがブルトンに渡された。それでもって、ブルトンはロンドンに赴き、ロリアンで滞在することができたのである。揉め事がジャクリーヌとの間に生じて、ブルトンはそれらがある種の場所の有害な影響の結果ではないかと自問する。」(AB pp.336-337)

この場所の問題についてはブルトン自身『狂気の愛』で触れていて、またフェルディナン・アルキエも指摘していることもあり、後で検討することになるのであるが、少なくともアンリ・ベアールの指摘によれば、二人の不和の原因は経済的な困窮にも原因があるかのようにも読み取れる。ブルトンの不安の原因とは、たまたまジャクリーヌと二人で訪れた場所で妙な雰囲気になり、二人の関係もぎくしゃくしてしまったのだが、後でわかったところによると、その訪れた場所では以前に殺人事件があったということである。「様々な物が持つ否定的な輝きによって引き起こされたにせよそうでないにせよ、危機は夫婦に深刻な影響を及ぼしたと思われる。」(AB p.337)

9 月 15 日にエリュアールがガラに出した手紙によれば、「ジャクリーヌはブルトンのもとを去った、決定的だと私は思う。彼女はアルジェリアで仕事を見つけた。ブルトンは子供と一緒に一人でいる。」(AB p.338)

ところが結局のところジャクリーヌは 10 月半ばには戻ってきて、生活がまた始まるというわけである[10]。既に指摘したように、ジャクリーヌとオーブがいつどこで過ごしたかということがある時期の特記事項として記されることになるのであるが、その点について改めてここで

問題にすることはないと思われる。むしろそういうことが問題になる程ブルトンにとっての問題は家族のことであり、他の女性のことではなかったのである。このような不和の時期にあたる 1937 年の 2 月に『狂気の愛』が刊行されていて、そこでジャクリーヌとの結婚が記されるくらいであるから、ブルトンの愛情は依然として続いていたと考えることができるだろう。そして問題とすべきはエクリチュールのことなのであるが、この点についてはまず『シュルレアリスムの哲学』においてフェルディナン・アルキエが指摘した『狂気の愛』に記された次の箇所に注目しなければならない。アルキエは「例えば『狂気の愛』の終わりにある物語だ。」(PS p.24)と書き、ブルトンの『狂気の愛』の中で記されているある体験を問題にするのだ。これは 1936 年 7 月 20 日午後 3 時頃のことだった。ブルトンとジャクリーヌはロリアン近郊のちょっとした浜辺を歩いていたのだ。その時二人の間は何かしらよくない雰囲気に包まれ、二人の関係はうまくいっていないのではないかと思うようになる。たまたま近くには一軒の家があり、何か不吉なものを感じたということである。ところがそこから離れて小さな砦のような所を過ぎる頃には気分もよくなり、決して二人の間がうまくいっていなかったわけではないのだとわかるということだった。後でわかったところによると、その不吉な感じのした一軒の家では、以前にミシェル・アンリヨが年若い妻を猟銃で撃ち殺した現場であるという。このアンリヨと妻もあまりうまくいっていなかったということであった。このことから不吉な場所の持つ「有害な放射、精神的な生活のまさに根源を侵す放射」(PS p.25) の犠牲になったのだと、ブルトンは考えるわけである。しかしこれはジャクリーヌとの愛情が問題になっているのであろうか。我々からすれば、そこにあるものは愛情を巡る様々な思いというよりは、全く別のものであるように思われる。だからこそアルキエはこの物語について触れた上で、次のように書くのである。「そしてシュルレアリスム的な作品の中に含まれるどれ程多くの他の物語が、我々の中に科学的もしくは哲学的と呼び得るが、間違いなく全く美学的ではない一つの問いを生じさせることで、同様に我々を文学から引き離すことか！」(PS p.26)

このように考えるならば、『狂気の愛』においてブルトンがジャクリーヌについて展開したエクリチュールというのは、結婚したという事実を報告した以外にはないのではないかということに気付かされるわけである。たとえ実際には不和であったとしても、ブルトンはジャクリーヌに愛情を注いでいたわけであり、仮に愛情がエクリチュールを生み出す源泉だと考えるならば、『狂気の愛』という題名に象徴されるが如く沸き立つものがあるはずなのだが、ジャクリーヌについてブルトンは何故エクリチュールを展開しなかったのか、あるいはできなかったのかという疑問が生じてくることになるわけである。

第三章　第三の妻、エリザの場合あるいはその周辺

1941 年にブルトンはアメリカに向かうことになるのだが、この時はジャクリーヌとオーブも同行している。ところが 1941 年の秋には、ブルトンとジャクリーヌは別居することになる。そして 1943 年の夏にジャクリーヌはアメリカ人の彫刻家であるデヴィド・ヘアと生活を共にするようになる。このような状況の中、1943 年の 10 月 10 日頃にブルトンはレストラン・ラレーズでエリザと知り合うことになる。1944 年の 3 月 8 日にブルトンはパトリック・ワルド

バルグに手紙を書いているのであるが、その中で秘法 17 番について本を書こうとしていること、その中でモデルとして自分の好きな女性を取り上げるとしているのであるが、その女性こそエリザであり、ブルトンにとって第三の妻となるのである。ブルトンとエリザは共にヴァカンスを過ごしたりするのであるが、この時期ブルトンは『秘法 17 番』を書き、1945 年の 6 月 3 日にはエリザにこれを捧げている。この時期においてブルトンとエリザは実質的には夫婦同然であったと思われるが、アメリカにおいては法的に結婚していないことでの煩わしさもあったようで、離婚と結婚という手続きをとることに決め、1945 年の 7 月 30 日、ジャクリーヌと離婚し、エリザと結婚している[11]。資料によれば、ブルトンとエリザは二人で旅行に出かけるなど幸せに生活を共にしていることが窺える。この時期に書かれた『秘法 17 番』はジャクリーヌと別居し孤独に悩まされる暗い日々も描かれているが、レストランで出会ったエリザをまさに自分自身にとって存在する女性として見定めていることがわかる。つまりアンリ・ベアールも指摘しているように、「『秘法 17 番』のテキストはこの霊感を与える身近な女性なしには、彼女を人生に引き止めておきたいというこの意志なしには理解されないだろう。」(AB p.408)

確かにブルトンは『対話集』において、『秘法 17 番』という著作に関係して次のように述べているのだ。「しかし私の精神の中において、この『秘法 17 番』という題名が限りなく貴重な存在である私の傍らにいる身近な女性によって確実に決められていたということも確かなのです。彼女にとって、私たちが出会うほんの少し前、人生はあらゆる存在理由を失っていたということを私は知っていましたし――だから私は＜人生に復帰＞させることしか切望しないだろうということもわかっていました。」(PIII p.558)

そして『秘法 17 番』においても、ブルトンは次のように書いている。「それに対する最も美しい義務は、それが君を愛していたように君を守ることなのだ。／それこそ私にとって私が話題にした、そしてこの冬の初めに君一人のおかげで手に入れることが出来たこの新発見のまさに鍵だったのだ。」(PIII p.80)

ブルトンのエリザに対する愛を疑うわけではないが、果たしてここにエリザは存在するのであろうか。我々がこの『秘法 17 番』というテキストを前にして感じるのは、エリザをもとにし、エリザへの愛があたかも芸術作品として昇華されたのではないかということなのである。エチエンヌ-アラン・ユベールが指摘しているように、『秘法 17 番』を文学的にはどのような範疇に入れていいかという疑問が生じてくる所以である。つまり随筆なのか、物語なのか、散文詩なのかというわけである。もちろんこのような分類に意味があるわけではなく、むしろこのような分類をも超越する形で作品が存在するのだということになるわけであるが、逆に言えばエリザとの体験が基になっているにも拘らず、そこにいるのはエリザという一人の女性というよりは一般化された理想の女性という風に捉えることができるのである。確かに『秘法 17 番』は「エリザ」という名前の呼びかけで始まるのであるから、エリザについてエリザのために書かれたものであるとするエチエンヌ-アラン・ユベールの見解[12]も当然のことだと思われる。しかし我々は、この『秘法 17 番』においてブルトンが用いている人称の問題に注目しなければならないと考えている。つまり『秘法 17 番』は既に指摘したように「エリザ」という呼びかけで始まるのであるが、その後の記述は次のようなものである。「私たちはまさにその朝、曇

った天気の中を、満帆を掲げた漁船に乗って、一巡りしていて、私たちは初め黄色や赤色の樽で出来た浮きが全く偶然ではあるがホガート風に配置されているのを気に入っていた。」(PIII p.37)「旗が風でパタパタと鳴る音がずっと私たちに同行していた、生き生きとしてそして絶えず青いコテの気紛れで大きな動きで繰り返される雪の泡で一段一段縁取られている島の切り立った岸壁が見せる眺めに、私たちの注意が想像力に挑みながら引き付けられていた瞬間を除いては。」(PIII p.37)

つまりここにおいて主体は「私たち」二人なのである。しかしこのすぐ後から、ブルトンは「私たち」から解放される。「そうなのだ、私としては、この光景は私を捕えてしまっていたのだ。ある 15 分間私の思考はこの脱穀機の中で自らが完全に燕麦になりたいとしっかり思っていたのだ。」(PIII p.37)

これ以後『秘法 17 番』は二箇所を除いて全て「私」で語られることになる。その二箇所とは「私たちの旅の道連れの一人」(PIII p.40) と「私たちの頭上で一団となって、永遠に暗く閉じられた窓を思わせる旗が大気を一升飲み続けていた。」(PIII p.41) である。

つまり当初はブルトンとエリザの二人の世界であったこの現実の世界が、少しの間でブルトン一人の世界と変化してしまったのである。もちろん「お前」という二人称が用いられることからもわかるように、相手が存在した上での愛であることは明らかである。しかし『秘法 17 番』は「エリザ」という呼びかけで始まったのであるが、途中からそれは「メリュジーヌ」という半分女性で半分蛇という存在へと向けられる。「叫び声の後のメリュジーヌ、胸の下のメリュジーヌ、私は秋の空に彼女の鱗がきらめいているのを見る。」(PIII p.63)「メリュジーヌ、それはまさに小さな湖のモミの木の間に姿を消す見事で感動的な彼女の尾なのだ、そこからサーベルの色合いとフリンジを帯びるのである。そうなのだ、それは消えた女性、男性の想像力の中で歌う女性であるが、女性にとっても、男性にとっても、幾多の試練の果てに、それは再び見出された女性にもなるはずである。」(PIII pp.63-64)

つまり最初はエリザが存在し、そのエリザによって霊感を受けたブルトンが『秘法 17 番』を書いたのであって、エリザはほとんど原型を留めない形で変形させられてしまっている。エチエンヌ-アラン・ユベールは「エリザの姿は、目に見えるものであるにせよ、ヴェールをかけられているにせよ、最後の頁において決して不在であるわけではないと付け加える必要があるだろうか。」(PIII p.1166) と書いているが、敢えてそのことに言及しなければならない程であるとは言えるだろう。我々は『秘法 17 番』を読むことによって、ブルトンがエリザという女性に愛情を抱いているということは充分に理解できる。とは言いながらも、我々はこのテキストを通してエリザという女性が具体的にどういう女性であるのかということはほとんどわからない。ブルトンにしてみればわからせる必要もないということなのかもしれないが、我々がこの論考において問題にしている体験に基づいた具体的なエクリチュールは見出せないというべきである。これは恐らく『秘法 17 番』が「詩、自由そして愛」(PIII pp.94-95) で締め括っていることとも関係しているかもしれない。つまり我々の問題にしているエクリチュールとは詩ではないのである。それでは何かという問いに対しては、物語と答えることも可能であると思われるが、定義付けすることにあまり意味はないであろう。我々は第二部において具体的にそ

のシュルレアリスム的エクリチュールと我々が捉える実例に則して、それが成立する根拠について検討を加える段階に至ったわけである。

第二部　ブルトンはテキストにおいてどのような女性をどのように書き記すのか

第四章　『ナジャ』とナジャ

ブルトンの代表的三部作は『ナジャ』『通底器』そして『狂気の愛』とされていて、我々がこの論考で扱うのもこの三部作なのである。ブルトンは 1939 年 12 月 2 日のジャン・ポーランへの手紙の中で『ナジャ』と『通底器』と『狂気の愛』を一冊の本にまとめたかったということを言っているのだが、ブルトンにとって代表的著作であるから取り上げたということではなく、ブルトンの全ての著作を調べた上で、我々の問題にするエクリチュールが展開されているのがこの三部作だったわけである。これは偶然の一致と言うべきか、だからこそ代表的三部作と言われるのか明らかではないが、興味深い符合ではあると思う。まず我々が取り上げるのが『ナジャ』であるのだが、この作品には既に指摘したことであるが先行するテキストが存在する。それは『失われた足跡』に収録されている「新精神」という一文であって、マルグリット・ボネも指摘しているように、「この短い物語は『ナジャ』を予告しているのである。」(PI p.1278)

しかし何故「新精神」なのか。マルグリット・ボネによれば、「ブルトンは＜新精神＞として精神のある種の取組み方を示している。つまり思いがけない出来事に対する精神の自由さであり、警戒能力である。」(PI p.1278)

更にマルグリット・ボネはこれについて『アンドレ・ブルトン』において自論を展開している。重要であると思われるので引用しておこう。「物語は空虚、事件の不在に対して開かれている。結論もなく、論評もなく、失望の告白さえなく、説明のつかない感情の強さの前でただ驚いていると告白するのである。（中略）新精神を構成し得るのは、科学の発見によって日常生活に導入される変化の高揚ではない。それは、表明されていると同時に突然中断されたりもする生活の奇妙な信号を窺い、うまく手に入れることを人に可能にさせる敏感な気持ちのあり方ということで探すべきものなのである。夢の物語のように、自動記述のテキストのように、欲望の流れや希望や恐怖の波に導かれて、それらの信号はその図形を明晰に解読することはまだできないとしても、無意識の領域を叙情的に開拓することを偶然の出来事によってまで助けるのである。」(PI pp.1278-1279)

まず言えることは、テキストの長い短いではない。そしてそこにあるのはある種の謎の提示であり、その謎に答えようとすることなのである。つまりアンリ・ベアールが言うように、「目覚めさせられた生活のある種の不可思議を探しに行くこと、失望した上で、ある種の夢におけるように、途方に暮れさせられるがままにしておく＜非常に奇妙な神秘的な呼びかけ＞に応えることが重要なのである。ネルヴァルの『オーレリア』がまさに明らかになろうとしているところであり、ブルトンが『ナジャ』において展開することになるであろう全ての問いかけである。」(AB pp.148-149)

ここに至って我々は『ナジャ』を解読していく準備が整ったわけである。『ナジャ』は様々な問いかけによって構成されていて、まず本体それ自体が「私とは誰か。」(PI p.647) という問

いかけで始まるのだ。『ナジャ』をブルトンの自己同一性を探求する物語として捉える読み方もあるわけであるから、『ナジャ』の提示する謎もその観点から理解することも可能である。ただそれは一方で広がりを見せることも事実であって、自己同一性という言葉で一括りにしてしま得ないということも事実としてあるのだ。つまり冒頭の「私とは誰か。」の次には「もし例外的に私が一つの格言に頼るとしたなら、確かに全ては私が＜交際している＞のは誰かを知るのと何故同じことにならないのだろうか。」(PI p.647) と続くのである。

そしてその流れで『ナジャ』を読んでいくならば、その誰かとは他ならぬナジャであることが明らかにわかるのであるが、ブルトンはそのナジャについて今度は次のような問いを投げかけるのである。「まさに立ち去ろうとしているところで、私は他の全てのものを要約している一つの問い、それをするのは私以外には多分なく、しかし少なくとも一度、その問いかけに太刀打ちできる答えを見出した一つの問いを彼女に投げかけたいと思う。つまり＜あなたは誰＞。」(PI p.688)

この問いかけはナジャ本人に向けられたものであるが、ブルトンはナジャと会わなくなった10月12日以降においても「本当のナジャとは誰なのか。」(PI p.716) と自問するわけである。

この時ブルトンは実際にナジャとの関わりにおいて体験したナジャの具体的な事例に基づいて答えを見出そうとするのである。決して抽象的観念的議論に陥ることなく、あくまで日常生活、ごく一般的な社会生活の次元においてどういう人物であるかを判断しようとするのである。これについての答えは明確に見出されることはないのであるが、ブルトンはそのこと自体にはそれ程深刻ではないようである。つまりブルトンは次のように書くのだ。「私がどんな欲望を抱いたにせよ、そしてまた恐らくはどんな幻想であったとしても、私は彼女が私に提示していたものに恐らくは太刀打ちできなかったのだ。しかし彼女は私に何を提示していたのか。そんなことはどうでも構わない。」(PI p.736)

ここから明らかになるのは、ブルトンにとっての問いかけがいかに切実なものであったとしても、ナジャはその答えを見出すための一つの手掛りもしくは媒体であって、他に手掛りはないというわけではないのである。というのも答えを未だ見出せないとしても、それを見出すもの能力といったようなものは既にあり、答えは外界に存在する信号から見出すとしても、それをそれとして認識するのは自らの精神にあるわけであるから、言い換えるならば答えは既に自分の中にあって、ただ今のところはそれを解読できていないにすぎないという言わば余裕の為せる業なのである。だからこそブルトンは次のように書くのである。「重要なのは、私がこの世で徐々に自分に発見していく個人的な能力は、私に固有のものだろうが私には与えられていない一般的な能力の探求から私の気をそらせることは全くないだろうということだ。」(PI p.648)

このようにしてブルトンは外界において示される様々な信号を感知しようとするわけで、そのあたりのことは次のように表現されている。「問題なのはいくつかの事実であって、それらは純粋な確認をされた種類のものであったとしても、その都度ある信号の痕跡を見せていて、正確にはどんな信号か言うことはできないにしても、一人の状態の真っ只中で、私が一人で船の舵を取っていると思っているといつも私に私の幻想を認めさせるありそうもない助力を自分に発見するという結果になる事実なのである。」(PI p.652)

従ってここから明らかになることは、問いかけが自己同一性に関するものであるととりあえずは仮定したとして、自分は自分であるという同語反復が可能な心理状態が前提としてあり、それが精神的な余裕をもたらすことにもなるのであるが、その自分は自分であるという同語反復を自分以外の何かによって置き換えることで外界と妥協し共生していこうとするならば、何らかの信号を頼りにしてその代替物を見出していかなければならない。自分はあくまで自分であるということに固執することによって、その代替物とは外界に存在する例えば他者であるということにはならず、あくまで実在するものは自分であり、置き換えることができるのは自分以外の言葉しかないということにもなる。そこで必要になってくるのは外界の発する信号を読み解くという作業であって、重要なのは知るということなのである。だからこそブルトンは『ナジャ』の冒頭において「私とは誰か」という自己同一性を問題にするような問いかけをしたとりあえずのまとめとして、次のように書くのである。「私が自分に認める好み、私が自分に感じる親和性、私が受ける誘惑、私に起こり、私にしか起こらない出来事、そういったものの全てを越えて、私が自分の心に抱くのがわかる衝動、私一人が抱くことになる心の高ぶり、こうしたものの多くを越えて、他の人たちと比べて、私の識別は何に原因があるかまでいかないにしても、何にあるのかを知ろうと努めている。」(PI p.648)

だからこそブルトンにとってナジャの存在とはあくまで数多く存在するものの中の一つであり、人特に女性ということに限って考えたとしても、あくまで数多くの女性の中の一人にすぎないということが言えるだろう。「人生とは暗号のように解読されることを望むのかもしれない。」(PI p.716) と書くブルトンにとって、様々な要素がありながらも女性を通して謎の追究を図ろうとするのは、愛によって幸福を求めるブルトンの生き方と関係しているだろう。そして女性たちの中でナジャがその考察の対象となったことについて、ナジャ自身がシュルレアリスム精神の具現化として捉えられていたことが一つの理由として考えられるだろう。つまりブルトンはナジャのする話や生き方に関して、「人はそこでシュルレアリスム的な憧れの頂点、その最強の限界理念（下線原文）に達するのではないか。」(PI p.690) と指摘しているのである。とは言いながらも、ブルトンがナジャのことをどれだけ愛していたかという点については、テキストを読む限りにおいても疑問が残る。ブルトンは 10 月 7 日の記述において、次のように書いているのだ。「しかしながら、午前中ずっと、私はナジャがいなくて寂しかったし、今日彼女と会う約束をしていなかったことについて気がとがめた。私は自分のしたことを後悔している。私は彼女をあまりにも観察しすぎているように思えるが、他にどうしたらいいのだろう。彼女は私をどのように見て、どのように評価しているのか。もし私が彼女を愛していないのなら、私が彼女に会い続けることは許し難い。私は彼女を愛していないのか。」(PI p.701)

そしてブルトンがナジャと会わなくなった後の述懐において、ブルトンは次のように書いているのだ。「私は結構ずっと前から、ナジャと理解し合うということがなくなっていた。実を言えば、恐らく私たちは理解し合ったことが一度もなかったのだ。」(PI p.735)

テキストからだけでもこのように読み取れるわけであるが、既に触れたように『ナジャ』が書かれた時期のブルトンにとっては数々の女性問題が生じていて、逆に言うならば、ナジャを愛したということすら現実にはあり得ないことではないかと思えてくる程である。まずブルト

ンが『ナジャ』を執筆するためにアンゴの館にやって来た時、当時のシモーヌは別の所にヴァカンスに出かけていて、既に指摘したように二人の間は不和の状態であった。従ってこのことだけを捉えて考えるならば、ナジャを愛していないことの証明にはならず、むしろ肯定的に捉える要件となりそうな具合である。むしろブルトンはこの時期リーズ・メイエと別れようと必死の努力をしていて、気分的にも落ち込んでいたのである。ところがこのナジャとの出会いが1926年の10月4日、そして『ナジャ』を執筆し始めるのが翌年の1927年の夏以降ということになるのであるが、この1927年の恐らくは10月にシュルレアリストたちの集まるカフェでシュザンヌと出会いお互いに惹かれ合うわけで、『ナジャ』のナジャの物語以後の部分を書いたのが1927年の12月の終わりであって、それまでとは違った高揚感に満ちているのもそのためである。ちなみにシモーヌとの離婚という考えを受け入れ、またシモーヌに受け入れさせるのが1928年の秋ということであるから、『ナジャ』を書くもととなったナジャとの出会い、更には『ナジャ』の執筆の時期における現実の女性関係というものは大体のところ以上のようなものであったと考えられるだろう。シュザンヌに関して言えば、ブルトンとお互い惹かれ合い、二人で南フランスに出かけるまでに至るのであるが、この後シュザンヌはブルトンと別れ、以前からの愛人であったエマニュエル・ベルルと結婚してしまうことになる。『ナジャ』の最後の部分の唐突に哲学的で抽象的な議論が展開されるのもこのためであるかもしれないし、『通底器』においてはこのことが明らかに影響することになるわけである。またナジャについても、ブルトンは当時の妻のシモーヌに包み隠すことなく手紙で告白していて、そのことが逆にシモーヌを追い詰めることになるわけであるが、ブルトンが1926年の11月8日にシモーヌに出した手紙の中でナジャに触れて、「どうしたらいいのだ。何故ならこの女性を私は愛してはいないし、多分決して愛することはないだろうからだ。」(PI p.1514) と書いているのである。再びテキスト自体に注目するなら、ナジャが数多くの女性の中のあくまで一人にすぎない存在であることは予想されるのである。ブルトンがナジャとの関わりにおいて本心ではどのように思っていたかを述べた箇所において、次のように書いているところがある。「私がヴェルサイユからパリまでの道中自動車を走らせていたある晩、私の傍らの一人の女性、それはナジャだったけれども、まあ全く別の女性、そして別の誰か（下線原文）でもあり得たわけだが、彼女が自分の足でアクセルの上に押し付けられた私の足を抑え、自分の手で私の目をふさごうとしながら、終わりのない接吻がもたらす忘却の中で、私たちがそれぞれにとって、恐らくは永遠に、最早存在しなくなることを、こんな風に全速力で私たちが大きな木々を迎えに行くことを望んでいたのだった。」(PI p.748)

ここまで愛の形の理想に思いをはせながら、相手についてはナジャでなくても別によかったということを書いているのである。またナジャの物語の後の部分において、現実にはシュザンヌが現われたということを受けて、『ナジャ』のテキストにおいては「君」という名のもとにシュザンヌを賛美する記述が展開されるわけであるが、そこにおいてもブルトンが次のように書いている箇所がある。「故意にそうするのではなく、君は私の予感のいくつもの顔と同様に、私にとって最も慣れ親しんだ体つきに取って代わった。ナジャはこれらの顔に属していたが、君が私から彼女を隠してしまったのは見事だ。」(PI pp.751-752)

ここにおいて「私にとって最も慣れ親しんだ体つき」とは何かについて、マルグリット・ボネは「1920 年以来ブルトンにとって最も慣れ親しんだものであった。」(PI p.1561) と記している。具体的にはブルトンの妻であるシモーヌ、ナジャ、そしてリーズ・メイエということである[13)]。つまりナジャはあくまでブルトンにとっての数多くの女性の中の一人にすぎないということなのであるが、ならば逆に言うなら、何故ブルトンは自らのエクリチュールの対象としてナジャを選んだのであろうか。その一つの理由としては既に指摘したように、ナジャがシュルレアリスムの精神を体現していたということがあるだろう。しかしそれだけではあるまい。例えばブルトンが翻弄されやっとの思いで別れることを決意したリーズ・メイエについても、実は『ナジャ』のテキストにおいて登場しているのだ。『ナジャ』はナジャの物語を本体としてその前後に批評的なテキストが置かれている。ナジャの物語の前の部分においては、「体といった観点の他で私が人生を理解することができるような（下線原文）私の人生の最も重要な出来事」(PI p.651) を書いているのだが、その中に出てくる青い手袋をした女性がシュルレアリスム本部を訪れた時の出来事がリーズ・メイエに関するものなのである。つまりその青い手袋をした女性こそリーズ・メイエであって、その手袋については印象に残っているからこそここで一つの挿話として書かれたのであるが、ならばこれ以後のリーズ・メイエとの関わりについて何故エクリチュールの対象とされなかったのかということになる。更に言うなら、ブルトンの妻であったシモーヌについてその存在を忘れてしまう程、実際アレキサンドリアンの『ブルトン』においては全く触れられていないという程、その存在がテキストとして残っていないのは何故かという疑問も出てくる。つまりナジャとシモーヌやリーズ・メイエとの決定的な違いは何かというあたりから解決の糸口が見えるように思われる。シュルレアリスム的エクリチュールが展開されるためには、そのような条件が必要であったと我々は考えるわけである。

第五章　『通底器』とシュザンヌ

『ナジャ』については前後に批評的な部分があるが、本体はナジャの物語であって、我々が問題にしているエクリチュールとはこの物語の部分のことなのであるが、さて『通底器』は夢の分析に基づいた理論的な書物として捉えられているわけで、我々が問題にするエクリチュールとはどの箇所を指しているのかまず明示しなければならないだろう。ブルトンは『通底器』において夢の分析ということからフロイトに言及しているわけであるが、フロイトは自らの夢の分析において私生活を公けにすることをためらっていて、そのこと自体を非難してもいる。それに反してブルトンは自らの夢の分析において自らの内的生活を明らかにしていて、我々が対象として捉えるのもまさにこの部分なのである。『通底器』は第一部、第二部、第三部といった三部構成になっていて、その第一部の中でブルトン自身の見た二つの夢が分析の対象となっている。その二つの夢とは「1931 年 8 月 26 日の夢」と「1931 年 4 月 5 日の夢」である。夢を見た時期と『通底器』における記載の順序が前後しているが、マルグリット・ボネの作成した年譜によると 1931 年の 4 月は「パリをさまよう、愛の幻想（『通底器』第二部を参照のこと）」(PII p.XXXIV) と書かれている。またこの年の夏にはヴァランティーヌ・ユゴーと知り合い、7 月には共にヴァカンスを過ごしている。『通底器』を書き始めるのがこの後のことである。も

っともこの 1931 年の前の年である 1930 年にはシュザンヌとの破局があり、ブルトン自身非常に落胆していたことも踏まえておかなければならないが、それを受けてブルトンの次の記述があるのである。これは既に触れた「1931 年 8 月 26 日の夢」の分析に際して、「解説的覚書」と称して書かれたものである。「1931 年という年は私にとって極めて暗い見通しで始まった。気持ちはずっと思わしくなかったし、この本の第二部で、私がある種の目的のために当時の私の乱行のいくつかを説明しなければならない時に、人はそのことが十分にわかるだろう。Xは最早家にはいなかったし、彼女がいつか戻るということも最早ありそうではなかったのだが、私は長い間ずっと彼女を引き止めればいいと思っていたのだ。私の力などほとんど信じていない私だが、私は長い間私の力についてもしそれがあったのなら、ずっと彼女を引き止めるために全て使用されなければならないというこの考えを抱いていた。私が若い頃に抱き、私を間近で見た人たちは私が、恐らくは防御できないと思われる以上に、絶望的な気力でもって守ったと言い得るだろう、唯一の、相思相愛の、全てに逆らって実現可能な愛についてある種の考え方はこのような事情となっていたのである。この女性、彼女がどうなっているか、彼女がどうなるかについて、最早全く知らないことを諦めて受け入れなければならなかった。それはむごいことであったし、途方もないことだった。私は今日それについて話しているし、私が話しているこの思いがけないこと、この惨めなこと、この驚異的でどうでもよいことが起こっている、私はそれについて話したということが言われるだろう。以上で、胸の内に関してはもう御仕舞いだ。」(PII pp.120-121)

ここで「X」として示されている女性はシュザンヌである。『ナジャ』の最後の部分で「君」として示され、唯一無二の女性として称賛されていたのもシュザンヌなのである。我々はまずここにおいて同じ女性に対して『ナジャ』と『通底器』において書き方が全く違っていることに注目しなければならない。確かに『ナジャ』の最後の部分を執筆している時期に知り合い、お互いに惹かれ合って南フランスまで旅行に出かけているのに反して、『通底器』の執筆の時期には決定的な破局を迎えているというわけで、状況の違いというのは前提としてあるのだが、それは敢えて言えば語調や内容に反映されるべきもので、書き方が決定的に違っているということの説明にはならないだろう。『ナジャ』における「君」というのは、ただ単にテキストだけを読むならば、具体的に理想の女性がいるというのではなくて、言わばこれから出現するであろう理想の女性を一般化して提示したものと理解することも充分可能なのである。ところが『通底器』においては、シュザンヌという名前を明らかにすることはないまでも、「X」として提示した上で、「私の愛人、以前は。」(PII p.118) と注で明らかにしているのだ。つまり『通底器』のテキストにおいては具体性があるのだ。そして更に言うなら、『通底器』は『ナジャ』の後編という様相を呈しているということがある。『ナジャ』におけるナジャの物語は 1926 年の 10 月 4 日から 10 月 12 日までの出来事が中心になっていて、それ以後ナジャに全く会っていないわけではないだろうが、そのあたりのことはあまり明確ではない。そしてそのような時期に書かれたものとして次のような記述がある。「数か月前に、ナジャは気が狂っていると私に知らせに来た人がいる。ホテルの廊下で身を委ねていたと思われる奇行の結果として、ヴォクリューズの保護施設に収容されなければならなかったのだ。」(PI p.736)

この後ブルトンはナジャに一度も会っていないと思われるが、そのあたりのことが特にブルトンの心情面において『通底器』には書かれているのだ。1931 年 8 月 26 日の夢は次のように始まっている。「一人の年老いた女性が、激しく動揺して、（むしろローム駅に似ている）地下鉄のヴィリエ駅から離れていない所で待ち伏せている。彼女はXに激しい憎しみを抱いていて、どんな犠牲を払っても捕まえようとしていて、Xの生命は私にはこの事実から危険な状態にあると思われる。」(PII p.118)

これに対するブルトン自身の分析がこの後に書かれていて、それは次のようなものである。「気が狂っていると思われる年老いた女性が＜ローム＞と＜ヴィリエ＞の間で見張っている（下線原文）。それはナジャであって、私は少し前彼女についての物語を出版したばかりだったし、私が彼女と知り合った時、彼女はシェロワ通りに住んでいて、夢の道筋がまさに通じているように思われる所なのだ。」(PII p.122)

これだけなら、ブルトンがナジャのことをまだ心理的に引きずっているのだなという風に理解するだけで終わるのである。ところがこのような思いは、ただ単にブルトンの心の奥底にあって、言わば罪の意識のようなものとしてあって、現実には表立って出てくることはないが、夢の中ではこのような形で出てくるのだというわけではないのである。つまり現実の生活の中でもそれは出てきていて、シュザンヌとの関係にも影響を与える程なのである。つまり先程の分析の続きの中で、ブルトンはこのように書いているのだ。「精神的に健康であろうとなかろうと、彼女に関する私の本を読んで、そのことに気を悪くしたかもしれないナジャの帰還の可能性に対する防御（下線原文）、彼女の精神錯乱を入念に作り上げたことにおいて、そしてそれ故に彼女の収容において私がとり得た意図しない責任、Xが怒っている時に、今度は自分の番ということで、彼女を発狂させたいと思っていると私を責めながら、しばしば私に面と向かって口にした責任に対する防御（下線原文）」(PII p.122)

つまり『ナジャ』と『通底器』、ナジャとシュザンヌで話は繋がっているわけである。またシュザンヌ一人を取り上げて考えても、既に『ナジャ』において登場しているということも既に見たところである。このシュザンヌが『ナジャ』においてはあたかも理想の女性という形で一般化されたかのようにして現われ、『通底器』において具体的に語られることの理由は、ブルトンとの関係がどうであったかに求められるべきだろう。つまり『ナジャ』の最後の部分を書いている時点においてブルトンと共に南フランスに旅行したシュザンヌは愛人であるエマニュエル・ベルルとよりを戻しているわけで、更にはその後二人は結婚してしまうという事態に至るわけで、それにも拘らずブルトンはシュザンヌとの愛を信じているのである。実際、シュザンヌはベルルと結婚してから、ブルトンと生活を共にするわけで、変則的な事態とは言いながらもブルトンの愛は成就したと言えなくもないのである。ところが『通底器』の執筆の時点においては決定的にシュザンヌを失うということになっているわけで、まさにこのことをもってしてブルトンはシュザンヌを具体的に書くことができたと考えられるわけである。確かにブルトンは情熱的に愛した女性たち、この時点で言うなら、第一の妻であるシモーヌとか結局は翻弄されることになったリーズ・メイエのことを、詩の形で昇華して表現することはあったかもしれないが、具体的にテキストとして書き記すことはなかったのである。ならばその情熱的な愛

が終結したから書けたのかというと、それだけではないだろう。というのも既に指摘した女性たちについても、愛の終結というものはあるからである。それでは何故ブルトンはシュザンヌをテキストにおいて書き記すことができたのかということになるが、それはまさに謎の存在である。『ナジャ』においては冒頭で「私とは誰か。」(PI p.647) という問いかけが為され、ナジャの物語の中においては「本当のナジャとは誰なのか。」(PI p.716) と形を変えて存在し続ける。ブルトン自身は愛や希望という言葉を口にする。つまりナジャとの関係においてはまさに愛が存在したわけであり、テキストにおいては「私が理解している意味での愛のみが――しかし当時は不可解で、ありそうもなく、唯一の、驚くべきで疑う余地のない愛――結局のところあらゆる試練に耐えることでしか存在し得ないような愛のみが、ここにおいて奇跡の実現を可能にすることができたのであろう。」(PI p.736) と書かれている。

また『ナジャ』を書き続け、言わば作品として成立させることができたのは希望であるとし、テキストにおいては「中断の日付である 8 月の末から、この物語が、興味深い心の高まりの重みに私自身折り曲げられ、今回は、精神というよりも気持ちということで、私を感じやすい状態にしておくことになるかもしれないが私から離れる 12 月末に至るまで、その物語が守っている最良の希望そして、信じたい人は私を信じてくれるだろうが、これらの希望のまさに実現、全面的な実現、そうなのだ、ありそうもない実現で――人が生き得るように――私はどうにかこうにか生きていたと考える方がいいのだ。」(PI p.746) と書かれている。

確かにブルトン個人の心情としては偽らざるところであろうが、物語の成立という観点から見るなら、「私とは誰か。」(PI p.647) という問いかけで始まり、ナジャの物語が開始されるが、その物語が「誰だ。あなたなのか、ナジャ。あの世 (下線原文)、全くのあの世が現世にあるというのは本当なのか。私はあなたの言うことが聞こえない。誰だ。私一人なのか。私自身なのか。」(PI p.743) という更なる問いかけで終わるわけであるから、謎の維持、継続は明らかだろう。そして『ナジャ』自体の終わりも「ある朝の新聞が私の消息を私に知らせてくれるのに常に充分であるだろう。」(PI p.753) ということで、暗に謎は謎のままにしておくといった姿勢が窺われるわけである。この謎の提示と継続は物語を成立させるのに必要な要件であって、『通底器』においてはシュザンヌとは一体誰かといったような自己同一性を問うような謎は提示されないが、そこにはブルトンにとって具体的でより切実な問題が存在するのである。それは何故シュザンヌとうまくいかなくなったのかに尽きる。アンリ・ベアールは次のように書いている。「別離という苦悩にそれ以後二重の無知という苦悩が付け加わる。つまり何故彼女は彼を愛することをやめたのか。彼女は今どこにいるのか。／彼自身別離の悲痛な思いに耐えてどのように生き長らえることができるのか自問する。(中略) それは自分がうまく愛していなかったと認める、嫌われ者のいつもの戯言である。」(AB p.270)

もっともブルトンにしてみれば、心の奥底においてシュザンヌを責めたい気持ちもあって、先程指摘した 1931 年 8 月 26 日の夢の分析の中にはそのあたりの気持ちも窺われるのである。つまりまず 8 月 26 日の夢において次のような箇所がある。「私に狂人という印象を与えるその年老いた女性は建物の中に侵入するが、その建物の内部から警備をしているほとんど目に見えない人物が私に入らないよう合図をする。私は警察のかあるいは別のか、何かたちの悪い事件

を恐れる――監禁事件とかだ――それにXはかつて巻き込まれていたのだろう。」(PII p.119)

これを文字通り受け取るなら、今まで明らかにはされてこなかったもののシュザンヌは犯罪と関わっていたあまり素行のよくない女性という風に思われるが、ブルトン自身はこの夢に対して冷静な分析を行なっている。つまり「従って、この夢がX（<何かたちの悪い事件>）に対して人生において一度も正当化されなかった告発をしていることに、何も変なことはない。夢はここにおいて、私にとって最も話のわかる方法で、人生において私が愛していた女性を打ちのめすことができないでいた私が、幾度もこの主題について身を置いていた非常につらい思いをさせる疑いの誤りを明らかにしているのである。彼女は確かに私に対して罪があったのか、私も彼女に対して罪がなかったのか、我々の間で突然起こった破局はどの程度責任を問えるものなのか、それは私によるものなのかなどである。」(PII pp.127-128)

もちろんシュザンヌとの破局の原因が仮にわかったところで、再び幸せな日々が取り戻せるというわけではないのであるから、現実における悩みの解消とはまた違った次元のことなのである。つまりこれこそがエクリチュールの源泉となるものであって、現実における深刻な悩みと比べてみれば、いかに苦悩しているように見えても一種の戯れとも言い得るものである。しかしそれが現実においても戯れにすぎないものであるならば、エクリチュールを生み出すまでには至らないであろう。マルグリット・ボネの年譜において、ちょうど『通底器』を書き始める前の時期である 1931 年の 4 月の記述として「パリをさまよう、愛の幻想（『通底器』第二部を参照のこと）」(PII p.XXXIV) があるが、実際『通底器』のテキストにおいて 4 月 5 日の女性、4 月 12 日の女性との関わりが記されている。失意のブルトンにとって、街中で見かけた若い女性を恋愛の対象として捉えるのであるが、これということもなく終わってしまうのである。実際 4 月 5 日の女性について言えば、「私は彼女の後をつけなかったことについてひどく後悔していた。」(PII p.154) わけであるし、4 月 12 日の女性について言えば、ブルトンはこの女性と「共通したものは何も持ち得なかったのだ。」(PII p.161)

つまりある種の挿話として語ることは可能ではあっても、我々が問題にするエクリチュールとはなり得ないのである。それにブルトン自身次のようにも書いているのである。「従って以上が突然打ち切りになる物語であることよ。ある人物は作り出されるとすぐ別の人物のために見捨てられる――そして、他の人物のためと誰が知ってさえいるのか。そのため、導入部にこうして苦労することが一体何の役に立つのか。しかし彼の人生の何かを我々に打ち明けようと企てたと思われた作家は夢の中で話しているのだ――<u>夢の中にいるように</u>（下線原文）。」(PII p.155)

つまり女性たちを対象として彼女たちとの関わりをエクリチュールとして展開しようとしても、条件があるのである。彼女たちとお互いに惹かれ合うなどそれなりの密接な関係が必要ではないかとも思われるが、既に指摘したように『失われた足跡』の中の「新精神」に登場する女性は街中でたまたま見かけた美女ということであり、会話を交わしたことがないのはもちろんのこと、名前すらわからない状態なのであるが、『ナジャ』を予言する物語たり得ている。このように考えるならば、女性との関わりを通して女性がもしくは女性との関係がもたらす状況によって提示される不可思議な謎の存在があり、その謎を解くことによって自らの人生の何か

がわかるということであれば、それを語りたいエクリチュールとしたいということになるわけである。もちろん単純に解明される謎であるわけはなく、そのもととなった体験は繰り返し語られ、様々な答えの可能性を提供するわけで、エクリチュールの展開は大きく広がることになるのである。

第六章　『狂気の愛』とジャクリーヌ

ブルトンは『通底器』において夢の分析という形でシュザンヌとのことを明らかにしているが、それは『ナジャ』のように物語の形式を借りつつも事実を展開していくことにはためらいがあったためだろう。実際ブルトンはその時の苦悩と配慮を次のように書いているのだ。「私の知っている限りとしては、その時期、彼女の気持ちを傷つけないために、彼女の求めに応じて、私はいかなる名前でも呼ぶことのないある女性の行方不明が私に残していた苦悩によって突き動かされていた。」(PII p.149)

だからこそブルトンは『通底器』においてシュザンヌをXとして表記したのだろうが、このような配慮は『狂気の愛』においてもジャクリーヌや娘のオードのために書かれた書物であるにも拘らず、彼女たちの名前が一切出てこないのである。ある時はテキスト中において「オンディーヌ」と表記され、別の箇所では「ヒマワリの夜の段取りをする絶大な力を持つ女性」(PII p.735)と表記されている。まずはそのあたりの事情から見ておこう。「月による金星の＜星食＞の真っ只中の（この現象は年に一回しか起こらないはずだった）1934 年 4 月 10 日、私はある墓地の入口近くのかなり嫌な感じの所にある小さなレストランで昼食をとっていた。（中略）しかし私は、より好ましいすべきことがなかったので、この場所の魅力的な生活を観察していた。（中略）給仕をする女性はかなりきれいだ。むしろ詩的な感じだ。（中略）非常に霊感を受けた状況において、私がこの若い女性がどういう人物であるか理解しようと努めていた時、皿洗いの声が突然＜ここに来て、オンディーヌ！＞。」(PII pp.686-687)

ここで「オンディーヌ」と呼びかけられている女性とブルトンは 1935 年の 8 月 14 日に結婚したのであり、この女性こそジャクリーヌなのである。事実としては以上のようなことなのであるが、問題はむしろ別のところであって、まさに詩人ブルトンとしての展開が見られることになるのだ。まず先程のレストランでの出来事で、皿洗いが「ここに来て、オンディーヌ」Ici, l'Ondine! と声をかけた後のことである。「そして人当たりの柔らかい、子供っぽい、ほんのわずかため息をついた、完璧な答え、＜ああ、はい、ここでも仕事があるんです、皆さん夕食をとっているんです＞Ah! oui, on le fait ici, l'On dîne! これより感動的な光景があるか。私はジョン・フォードの芝居をアトリエ座の役者たちが台無しにするのを聞きながら、晩もまたそれを自問していたのだ。」(PII p.687)

日本語に訳してしまうとほとんど意味がわからないのだが、原文で皿洗いが彼女を呼びかけた時の名前が l'Ondine[lɔ̃diːn] であり、その給仕をする女性が皆さんが夕食をとっているところだと言っているのが l'On dîne [lɔ̃diːn] ということで、全く同じ発音になっているわけである。これが詩人ブルトンにとって響きのよい耳に残る言葉になるのである。実際ブルトンはこの [lɔ̃diːn] について、次のように書いているのだ。「この見事な出来事の専ら機知に富んだ操作を

まったくもって強調してしまったために、私が前のところでそれとなく言及している 4 月 10 日の会話部分の非理性的な性格と、本質的に理論的なテキストの最後で注釈なしでそれを再現するために私が感じた必要性に素早く注意を集中することしか私には残されていないのだ。人は確かに素晴らしく軽快で神秘的なこの光景に立ち戻りたいと思うだろうし、その展開は詩におけるコオロギの言葉に劣らず命令的なこれらの言葉で操作されている。つまり＜ここに来て、オンディーヌ＞、それに、そうこうするうち、消えることになる唯一のナイアス、この物語の唯一の生き生きとしたオンディーヌ、呼びかけられた人物とは全く別の女性が、あたかもこの督促に屈服するしかできなかったかのように、全ては起こる。」(PII p.735)

ここにおいて論理的な説明は不可能だろう。レストランの中にあって、言葉を含む全てを支配することになった特別な存在が「オンディーヌ」という言葉なのである。そして更に注目すべきは、ここでも言及されている「ヒマワリ」という詩の存在なのである。ブルトンはこのオンディーヌ=ジャクリーヌと知り合い、その後も何度か会うことになるのであるが、その時不意にブルトン自身かつて作ったことのある一篇の詩が口から出てきたのである。それは我々が現在『地の光』において収録されている「ヒマワリ」という詩として読むことのできるものである。ブルトンはこの詩があまり気に入っていなかったようであるが、注目すべきことは、この詩がブルトンとオンディーヌとの出会いを予言していたことなのである。この詩について言えば、「この詩を時間の中に正確に位置付けようと試みるなら、私はそれが 1923 年の 5 月か 6 月にパリで書かれたと確認することができると思う。」(PII p.724)

ブルトンがオンディーヌ=ジャクリーヌに出会ったのが 1934 年の 4 月 10 日なのであるから、およそ 11 年の間隔があるのだ。この事実に気付いたブルトンは、自らの作ったこの「ヒマワリ」という詩を仔細に検討しようとしたのも当然と言えるだろう。何故ならこの詩を更に解明していくことによって、自らの人生をも解明することができるからである。ブルトンは自ら作ったこの詩に若干の手を加えてはいるのだが、そのことも踏まえた上で、次のように書くのである。「これらの細かい留保をつけながらも、枠組みとして上記の詩を持つ全く想像上の出来事と人生という観点からこの出来事の、遅れてやって来たけれども、その正確さにおいて何とも衝撃的な実現を突き合わせることは私は可能であると思う。」(PII p.725)

それはただ単に文学的な次元において詩を批評するということではなく、詩自体が人生を解明する神秘の謎を含んでいるかのように分析が行なわれるのである。だからこそブルトンは詩の中にある箇所を捉えて、次のように書くのだ。「もっと先でわかるように、最もゆっくりとした分析から引き出されるものは最も単純であり、そこで問題になっているのが本質的で、いつかそのうち私に明白になる資料であると考えないためにも最大の価値を与えなければならないものであると認めるあまりに多くの理由がそれでもなお私にはあるのだ。」(PII p.726)

つまりここにおいてブルトンの飽くなき分析の対象となっているのは、『ナジャ』における事実、『通底器』における夢と同等の位置にある詩なのである。特に『ナジャ』におけるナジャ、『通底器』におけるシュザンヌとの対比で言うと、『狂気の愛』においては現実にいるジャクリーヌ自身が分析の対象になっているのではなくて、そのジャクリーヌの出現を予言した詩の方が分析の対象となっているのである。このことについては、それまでのブルトンにおいて体験

しなければならなかった辛い思いから、新しく女性が出現し愛し合うという事態になろうとも、それと同時に「この言葉が到来するとすぐ詩において明らかになる心配事」(PII p.729) があるからであり、その心配事を解消する意味でも自らの人生を予言すると考えられる詩の分析に埋没することも当然なのである。ただそれはあくまで愛を通しての幸福の追求が前提にあって、ブルトンにとってこのような心配事は、「出発点として、この出会いを知って、新しい女性のために社会を探し求めることが出来たと考えると私の人生を共にしていた女性によって表明された心の高ぶりがあるように私には思われる。」(PII p.729)

このような流れで捉えるならば、『狂気の愛』はブルトンにとっての愛の結実の書ということになり、それなりに現実における愛の到達点を表わしているもののようにも受け取れるが、実際のところ 1934 年の 4 月 10 日にジャクリーヌと出会い、同年 8 月 14 日に結婚していて、その事実を『狂気の愛』のテキスト中において書いてもいるのであるが、この『狂気の愛』が刊行されたのが 1937 年の 2 月 2 日で、この時既にブルトンとジャクリーヌは不和の状態にあったのである。マルグリット・ボネの年譜によれば、1936 年の 5 月には重大な危機があったようで[14]、その後回復したりまた不和になったりを繰り返すことになる。このように考えると、ジャクリーヌとの不和が『狂気の愛』の刊行後のことであるならばまだ理解し得るとしても、まだ執筆中の段階において生じた不和にも拘らず、あたかも至高の愛を表現したかのような『狂気の愛』を内容を変更することなく刊行することは、一体いかなる意味があるのかと考えてみたくなるのである。ここにおいて決定的な結論を提示することはできないし、現段階においては所詮推測にすぎないわけであるが、ブルトン自身この『狂気の愛』を『ナジャ』、『通底器』との三部作として捉えていることから、そして『ナジャ』と『通底器』の繋がりがシュザンヌとの関係で捉えることが可能なことから、『狂気の愛』をシュザンヌとの関係で捉えることが可能ではないかということで、その点を探ってみる必要があるのだ。つまり『ナジャ』においてシュザンヌは理想の女性として提示され、称賛されていた。次に『通底器』においては、既にブルトンはシュザンヌを失っていて、何故このような結果になったのかを繰り言のようにして思い巡らすわけである。それでは『狂気の愛』においてシュザンヌはどのように扱われているのか。この点については既に指摘したわけであるが、ブルトン自身心の中のわだかまりもあるだろうが、シュザンヌは完全に過去の女性になってしまっているのである。ブルトンは『狂気の愛』の第三部の 1936 年の第二の付記において、次のように書いているのである。「私は最近彼女たち自身から聞いて知ったのだが、ジャコメッティと私がこのオブジェを検討していた間、私たちは<u>彼女たちを見ていなかったけれども</u>（下線原文）数秒早く、それを取り扱っていたばかりだった二人に<u>見られて</u>（下線原文）いたのだった。これらの人物のうちの一人は、私にとって何年間か行方不明で、『ナジャ』の最後の頁で話しかけている女性に他ならないし、『通底器』において X という文字で呼ばれている女性で、もう一人は彼女の男友達である。（中略）私には知られていないが、彼女はそうではないこの出会い、これこれのオブジェの上で非常に正確に展開された出会いが形成する奇妙な図（半ば暗く半ば明るい X という形で）は、この瞬間そのオブジェが私にとって長い間支配的であった＜死への本能＞をそれ自体において早めているように私に思わせるのである。（中略）しかし問題だったのは再び愛し始めることができる

ということであって、単に生き続けるということではないのである。」(PII pp.708-709)

つまりここにおいて現実的には不和が生じてきたとはいえ、ジャクリーヌとの愛が既に開始されていたわけであり、まさに『狂気の愛』はシュザンヌとの愛が確実に終了してしまっていることを意味していると捉えることが可能なのだ。このように考えるならば、『ナジャ』『通底器』『狂気の愛』はブルトンにとってシュザンヌ三部作と捉えることも可能なのである。もっともシュザンヌについて言えば、『通底器』においてXという女性として描かれるのが主で、それもブルトンが彼女を失ってからのこととして書かれている。また『ナジャ』においてシュザンヌについて触れられているものの、主として書かれているのはナジャについてであり、執筆はナジャと別れてからである。そして最後にあたかも希望と愛に包まれたかのような『狂気の愛』においてブルトンがこの執筆をするのが1936年の8月9月あたりであって、1937年の初めに刊行されている。この時期は既にジャクリーヌとの重大な不和が生じてしまった後であり、ジャクリーヌとの出会いを予言する詩は更にそれよりも十年以上前のことであり、全ては終わってしまってからの執筆ということに気付かされるのだ。

終章

フィリップ・ソレルスが1983年に発表した『女たち』は、作家ソレルスが自らの小説の中において分身たる作家Sを登場させ、その作家Sに自分は本当は誰なのかという問いかけをさせることで、作家Sを取り巻く現実を描写するという形をとっている。題名が『女たち』となっているのは、世界は女たちのものであるという考えから来ていて、小説の中ではいささか官能的な描写も見られることとなる。作家Sは当然作家としての生活を営んでいるわけであるから、作家Sの知人たちの様子も実際のソレルスの知人たちである有名な知識人たちを登場させその動向を描いて見せるという形をとっているため、ゴシップめいた読み方もされたようである。ある人物を取り巻く要因としては様々なものがあり、既に指摘したように様々な有名人もいるわけで、更にその有名人たちの思想や作品、あるいは私生活について書いていくとなれば、エクリチュールの広がりはかなりのものとなったことはむしろ当然だろう。ソレルスの意図としては何も一般読者受けを狙った内幕暴露ものを書くことにあるのではなく、書こうと思えばいくらでも書けるその題材をもとにして、いかに饒舌に語るかということにあると思われる。翻ってブルトンのエクリチュールに注目するならば、その対象はむしろ限定されていると言えるだろう。『ナジャ』に関して言うならば、1926年の10月4日から10月12日の9日間に限られるわけであるし、『通底器』に関しては、シュザンヌとの破局の原因、『狂気の愛』に関しては、「ヒマワリ」という詩と実際のジャクリーヌの関係に、それぞれ焦点が当てられることになる。もちろんだからと言ってエクリチュールが広がりを失うものになるのではなく、むしろ汲めども尽きぬ謎ということで、エクリチュールは実際終わることがないのである。この点についてはブルトン自身自覚的であって、例えば『ナジャ』においては次のような記述が見られるのだ。「扉のように開け放たれるがままにしてあって、実在の人物の名前を変えたモデルを探す必要のない本にしか興味を持たないことに固執するのだ。」(PI p.651)「偶然のように、この本の初めを知っていた君がそんなにも都合よく、そんなにも情熱的にそしてそんなにも効果的

に私に口出しをしてきたのは恐らく、私がその本を＜扉のように開け放して＞いたかったということ、そしてこの扉を通して私は君しか入って来るのを見ることはないだろうということを私に思い起こさせるためなのだ。」(PI p.751)

この「扉のように開け放して」という表現であるが、これはあるテキストが一個の作品としてのみ成立し、他の作品群やあるいは現実の生活とは別個に存在しているのを閉じているとするなら、まさにその逆ということであり、エクリチュールが人生とともにあるブルトンにしてみれば当然のことであるだろう。しかしこのことは、既に示したテキストが輪郭も定まらないまとまりに欠けたものであることを意味しない。既に指摘したように、それらのテキストはそれぞれ中心軸なるものによって構成されているのだ。例えば、ナジャの物語を構成している 10 月 4 日から 10 月 12 日までは不動のものであって、それに対してナジャの物語前、ナジャの物語後ということでの言及は当然開かれたテキストであるから可能なのであるが、更には 10 月 4 日から 10 月 12 日までの間に登場する人物や場所について時期をずらせた形で言及することも可能であろうが、この 9 日間については揺るぎない事実として存在することが前提なのである。これがいついかなる形で出会っていたかは明確ではないとなれば、テキスト自体が崩壊してしまうだろう。これは『通底器』や『狂気の愛』についても同様であって、『通底器』においては 1931 年 8 月 26 日の夢と、シュザンヌとの破局という事実がまず前提としてあり、『狂気の愛』においては「ヒマワリ」という詩とジャクリーヌとの出会いという事実が前提であって、これらの大枠は崩すことはできない。このように対象が明確化していることが、エクリチュールを開始する前提条件なのである。そしてそのような対象の明確化が可能となるためには、全てが終わっていなければならないということがある。ナジャとの出会いはまだ続いているという段階において、経過報告は可能だろうが、全体を見通すことはできないのだ。そしてブルトンはこのような点について自覚的であって、例えば『野をひらく鍵』に収録されている「シュルレアリスムの非国境的境界」において次のように書いているのだ。「その名に値する芸術作品は、子供時代の心の高まりのみずみずしさを我々に再発見させるものなのである。それは進行中の歴史を計算に入れないという厳しく定められた条件でしかそれを可能にすることができないし、人の心の中に深く響くものは虚構（下線原文）への組織的な回帰でしか期待されるはずがないのである。」(PIII p.667)

ここには恐らくブルトンが思想的に親しみを持っているヘーゲルの思想の反映を見て取ることが出来るが、ある事柄について全て終わってしまわなければ歴史としての認識を下すことができないという考えである。この意味において、『ナジャ』、『通底器』そして『狂気の愛』でエクリチュールの対象となっているものは既に終わってしまった事柄であり、それを覆すことは不可能なのである。『通底器』においてエクリチュールの対象となっているシュザンヌとの破局については、ブルトンは心情的にシュザンヌが戻ってきてくれることを期待しているわけであったが、それが最早期待することのできない決定的なものであるという点に注目しなければならない。また『狂気の愛』においてエクリチュールの対象となっているのはジャクリーヌとの出会いであって、これもそれ以後のことはどのようになるかはわからないにしても、この出会いについては最早どうすることもできない事実として厳然と存在するのである。唯一執筆時点

においてこの対象となっている事実を変更することができたのは『ナジャ』であって、その点を留意するなら、ブルトンの当時の心境も全く別の意味合いを持ってくることがわかるのである。10 月 7 日の記述においてブルトンは「もし私が彼女を愛していないのなら、私が彼女に会い続けることは許し難い。」(PI p.701) としているが、同時に「彼女が私に何を求めるにせよ、彼女にそれを拒否することは憎むべきで、それ程彼女は純粋で、全ての世俗の束縛から自由であり、それ程彼女は生活にほとんど固執していないが、素晴らしく大事にはしているのだ。」(PI p.701) という考えも示しているのだ。

ところが 10 月 12 日までのナジャの物語が終わった後では、このようになっている。「ここにおいてこの半狂乱の追求が終わるということがあり得るのか。何の追求か私は知らないが、精神的な誘惑のあらゆる技巧をこのように利用するための追求 (下線原文) なのだ。」(PI p.714)

これはナジャと会っている 10 月 12 日の記述の直後に書かれたもので、テキスト上においては少し空白を置いて印字されている。ナジャと会わなくなったことでもって「ここにおいてこの半狂乱の追求が終わる」と表現しているのだろうか。もし追求がいつまでも、少なくとも今後しばらくは続く必要がある、そのつもりがあるということであるならば、ブルトン自身「ナジャと別れることが結局不可能かどうかは、私次第でしかなかったのだ。」(PI p.718) と書くわけであるから、ブルトンが望めばナジャと会い続けることは可能だったのである。現実的には様々な理由があるわけであるし、ナジャも精神病院に入ってしまうという事態に至るわけであるから、結局は同じことになってしまうのであるが、『ナジャ』が、ナジャの物語が書かれるためには、ナジャと別れ、全ては終わってしまったということにしてしまわなければならなかったのである。このように対象が一つの枠として捉えられて明確化していることがエクリチュールを展開する上での前提条件なのであるが、現実的なことを付け加えるなら、テキストとして公刊しても差し障りがないかという配慮が必要になってくるわけで、これは表立ってはいないが、結局のところブルトンのエクリチュールを左右する重大な要因であるかもしれない。というのも、愛を賛美し、愛を通して幸福になろうとするブルトンが愛についてその具体例を語るにも拘らず、実際の愛の生活が描かれることは象徴的な詩という形をとらないとするとあり得ないからである。シモーヌについて具体的に書かれたテキストが存在するだろうか。ジャクリーヌにしてもエリザにしても半ばぼかされ、半ば一般化された形でしか表現されることがない。まず理由として考えられるのは、テキストとして公開してしまうと迷惑がかかり、実際の生活にも支障が出るということだろう。その意味では、ナジャは言わば社会の外に置かれてしまうということで、書きやすかったということが言えるのである。付け加えて言うなら、『失われた足跡』の中の「新精神」にしても、結局は問題となっている女性が見つからなかったのであるし、どこの誰ともわからないために容易に書くことができたとも言えるわけである。そして対象が明確化されると同時に問題となってくるのは、書く側であるブルトンの言わば心の余裕というか、実際の生活において愛に満たされていることが必要なのではないかということである。まず先に『通底器』の場合を問題にすると、1931 年の初めにシュザンヌとの決定的な破局があるし、3 月にはシモーヌとの離婚の判決が出るという具合で、ブルトンにとっては散々であるが、この年の夏にヴァランティーヌ・ユゴーと知り合い、7 月には二人でヴァカンスを

過ごすということになるのである。ブルトン自身ヴァランティーヌ・ユゴーに対して情熱的な愛情を注いでいたわけでもなさそうだが、逆にヴァランティーヌ・ユゴーの方はブルトンに対して情熱的であったようだ。彼女とヴァカンスを過ごした後、ブルトンは『通底器』の執筆に取り掛かっている。次に『狂気の愛』について考えてみるなら、当然の如くジャクリーヌと知り合い結婚するという事実があるわけで、後に不和になるとは言え、この点についても我々の主張は肯定されるだろう。そして最後に『ナジャ』についてであるが、これはまさに特徴的というか典型的な事例であると思われる。つまり、ナジャの物語が進行している段階においては妻のシモーヌと、そしてブルトンが翻弄され続けたリーズ・メイエがいたわけであるし、そしてナジャの物語が終わり、最後の部分が書かれる段階になってシュザンヌが現われるわけである。シュザンヌの出現の意味の大きさについては『ナジャ』の執筆過程に大きな影響を与えていると思われるので、その点を指摘しておこう。ブルトンはナジャの物語が終わった後の『ナジャ』の最後の部分を次のように書き始めるのである。「本のようなものを準備する時間を持ち、最後まで来た時、そのものの運命やそのものが人にもたらす運命に興味を持つ方法を見出す全ての人が（これは一つの言い方だが）私はうらやましく思う。途中で少なくともそれを諦める本当の機会が彼に起こったと私に信じさせておくことはないのか。彼は更に先に進んだろうし、何故と聞くことは我々の名誉となると期待することはできるだろう。(中略)この前にある行と、この本の頁をめくると、二頁前で終わったばかりに思われる行とを分ける隔たりにしか強い関心を寄せる気に最早ならないのである。非常に短い隔たりで、急いでいる読者やそうでない読者でさえ取るに足らないものであるが、私にとっては常軌を逸してはかり知れない価値があるときっちり言わなければならない。どのようにすれば私は理解してもらうことができるだろうか。」(PI pp.744-746)

執筆の時期を問題にするなら、1927 年の 8 月にアンゴの館に滞在して『ナジャ』の最初の二つの部分、つまりナジャの物語前の部分とナジャの物語を書いている。ちなみにこの時期にリーズ・メイエとは破局している。そしてこの後 11 月にカフェでシュザンヌと出会い、お互いに惹かれ合うこととなり、二人で南フランスに旅行に出かけるのであるが、パリに帰ってきた 12 月半ばにブルトンは『ナジャ』の最後の部分を書くことになるのである。従ってブルトンの指摘する間隔に実際に存在するのは、シュザンヌの出現ということになるのである。このように実際の生活において愛に満たされているという状態にあってこそ、余裕をもってエクリチュールに没頭することができるというわけである。従って逆から見れば、本当の愛というのはまさに現実の生活の中にあるのであって、エクリチュールにおいていかに愛が賞賛され、女性たちが描かれることになっても、そこで問題になっているのは実は愛ではなく、全く別のものではないかと思われるのである。それについては既に指摘した数々の謎ということで明らかにしているわけであるが、この点についてブルトン自身自覚的であって、ナジャの物語の前段階において数々の挿話を語るに際して次のように書いているのである。「私はついに私自身の体験、私にとって私自身について沈思黙考と夢想のほとんど断続的な主題であるものに達するのである。」(PI p.653)

そしてそれは全て愛や女性に関する挿話ばかりではないのである。愛や女性を語ることによ

ってその先に見えてくるものがブルトンにとっては重要なのであって、愛や女性の存在は重要であり、ブルトンにとってはかなりの部分を占めているだろうが、それでも到達点は別の所にあるのである。そのように考えれば、『秘法 17 番』において、ブルトンがエリザとの旅行を題材としてエクリチュールを実践し、全ては二人の世界ということで、人称も「私たち」ということで始まっているにも拘らず、それは次第に「私」に変わり、エリザの姿はいつの間にか消失してしまうことも理解されるだろう。

注

1)本論考において引用されている文の後の括弧の中に示されている略記号は以下の著作を示している。尚、引用文は全て筆者自身が訳出したものである。

(PI) André BRETON, *Œuvres complètes I*, Bibliothèque de la Pléiade, 1988
(Chronologie pp.XXV-LVII)
Les pas perdus, pp.191-308, 1924
Manifeste du surréalisme, pp.309-346, 1924
Nadja, pp.643-753, 1928
Second manifeste du surréalisme, pp.775-833, 1930

(PII) André BRETON, *Œuvres complètes II*, Bibliothèque de la Pléiade, 1992
(Chronologie pp.XXXIII-LXIV)
Les vases communicants, pp.101-215, 1932
Point du jour, pp.263-392, 1934
L'amour fou, pp.673-785, 1937

(PIII) André BRETON, *Œuvres complètes III*, Bibliothèque de la Pléiade, 1999
(Chronologie pp.XXI-XLVII)
Prolégomènes à un troisième manifeste du surréalisme ou non, pp.3-15, 1942
Arcane 17, pp.35-95. 1944
Entretiens 1913-1952, pp.423-639, 1952
La clé des champs, pp.651-959, 1953

(PIV) André BRETON, *Œuvres complètes IV*, Bibliothèque de la Pléiade, 2008
Du surréalisme en ses œuvres vives, pp.17-25, 1955

(PS) Ferdinand ALQUIÉ, *Philosophie du surréalisme*, Flammarion, 1977

(BR) ALEXANDRIAN, *Breton*, écrivains de toujours, Seuil, 1971

(AB) Henri BÉHAR, *André Breton　le grand indésirable*, Fayard, 2005

2)BR p.178

3)PI p.XLI, p.XLIII, p.XLIX

4)PI p.XLVIII

5)PI p.LIII, p.LIX

6)PI p.LIV, p.LV

7)PI p.LVI

8)AB p.276, p.273

9)PII p.XXXIV, p.XXXVI, p.XXXVII

10)PII p.XLI, p.XLVIII, p.L
11)PIII p.XXII, p.XXVII, p.XXVIII
12)PIII p.1165
13)PI p.1507, p.1561
14)PII p.XLVIII